

応援いただいた皆さんへ ありがとうございます 次世代へつなぐ

宮城県北の栗駒山にある駒の湯温泉は、1618年(元和4年)に開湯し、皮膚疾患や神経痛に効くとして知られ、湯治や登山をする人が立ち寄る温泉として知られ、湯守たちはこの地に冬も留まり温泉を守ってきました。戦前に曾祖父が前の経営者から買い取る形で経営を始め、祖父は満州で亡くなり、曾祖父から見込まれた父は婿となり、両親が曾祖父から駒の湯を託されました。戦後に曾祖父が息子の供養にと満州開拓の引揚者を中心に駒の湯に受け入れたことから、この地が開拓地となり、集落は「耕英」と呼ばれ、電気などが導入されインフラが整備されました。父は、国定公園を目指していた県や町の方針に従い、持っていた山林をキャンプ場用地として町に貸しました。温泉宿の周辺には細倉鉱山の山荘、栗原電鉄山の家、町営ヒュッテ、栗駒高原荘などの施設が建ち、山の観光の発展をおおいに期待し、努力してきました。その後、山にはいこいの村栗駒、ハイルザーム栗駒など大型観光施設が設置され、山は観光地として発展しました。

しかし、2008年(平成20年)岩手・宮城内陸地震によって駒の湯の対岸が崩れて沢をせき止め、同時に源流部で大規模崩落が発生し、大量の残雪を巻き込んだ土石流が駒の湯を呑み込んでしまいました。お客様や従業員、母と兄も含め、7人の尊いのちと共に温泉旅館と源泉が大量の土砂に埋もれました。巻き込まれながらも生き残った父と私はただ茫然と立ち尽くしましたが、半年後、枯れていた源泉が復活しているのを発見しました。その後、震災1年後の母の誕生日に行方不明だった2人の方が見つかり、3回忌に慰霊碑を建てることができました。その2年後…震災4年後にやっと被災現場の河川工事が終わり、荒涼とした被災現場が残されました。一人でも木を植えたいと言ったのを受け留めた県職員の方と県砂防ボランティアの方たちを中心に「くりこま絆の森プロジェクト」が結成、栗駒の自然を守る会や宮城建設株式会社、東京のNPOどんぐりの会などの力を借りて緑化活動が始まりました。最近ではジオパーク推進協議会もプロジェクトメンバーに加わり、地区の人、一般の人も参加され、応援団員や助っ人が手伝ってくれています。

東日本大震災が起き、山に来る観光客が少なくなっていました。駒の湯温泉の復活は到底無理と思われてか地図からも消えましたが、残った源泉の量が徐々に増え、温度が上がってきました。それを知った栗駒高原温泉郷協議会から、観光の起爆剤になればと足湯の桶をもらい足湯を始めました。しかし、足湯では無料提供せざるを得ない上、山に戻る目途もたらず不安な日々を送りました。その後、震災から5年後にやっと山に家を建てられたものの、温泉に関しては日帰り温泉ですら再開の目途は立ちませんでした。そんな中、足湯に来てくれたお客さんから幟をいただいたり、毎年のように遊びに来てくれる人も現れました。何よりも、お湯を喜んでもらえることで私たち自身も救われ、笑顔になれることが増え、7回忌の頃から温泉を復活させることが、亡くなった人たちの生きた証になるのではと思えるようになりました。小さな湯小屋しかできないけれど、日帰り温泉を再開する決意を固め、その時、寄付とお手伝いをしてくれる仲間を集めるため駒の湯復活応援団を結成してもらいました。

そして、震災から8年目の2015年10月、小さな湯船の湯小屋を日帰り営業することができました。しかし、その冬の休業中に家族が倒れ無理ができなくなりました。そんなときだからこそ前向きに食堂も含めて考え、栗原市の職員の方から助成金で浄化槽を設置するなどの助言を頂き、耕英地区にはない蕎麦屋を始めることにし、蕎麦カフェを建てました。自分も食べたいと思う蕎麦を出そうと北海道産そば粉の十割そばを自分で製麺し提供しています。そして、ゆっくりしてもらえ空間ができたお陰で増えたお客様との交流が私たちを支え、お手伝いをしてくれる仲間も増えてきました。旅館は無理でも、次世代に400年の温泉と森を残そうと、家族二人で頑張り、皆さまのお越しをお待ちしています。そして、温泉を守り、山の暮らしや森の再生などの活動をする仲間を募集しています。どうぞご協力・応援をよろしくお願いします。

駒の湯温泉応援団へのお誘い

駒の湯温泉 湯守 菅原昭夫

湯を守り、栗駒の自然を守るための仲間が増えてきています

桃源郷と言われた美しい森の中の温泉は土石流によって荒れ地と化し、すべてを失い、失意の中、高台に枯れかけた源泉が復活しているのを発見しました。この奇跡的な出来事はお湯を絶やすまいと思う気持ちにつながり、亡くなった母たちが残してくれた希望の光と信じ、駒の湯の長い歴史を次世代に残したい、また土砂ダムとなった被災地を緑化し、栗駒の大自然をいつまでも大切にしたいという気持ちが強くなり、活動を続けています。初めは家族二人だけでしたが、少しずつ手伝ってくれる仲間が増え、皆で活動する楽しみや喜びが生まれてきました。

活動から自然を学ぶ

森には手つかずの原生林と人の手を入れた森がありますが、駒の湯には両方があります。原生林には主(ぬし)の木と呼んでいる推定400年のミズナラの木があり、栗駒の自然を守る会で年1回しめ縄飾りをつけています。また、土石流で荒れ地と化した駒の湯被災地は、「くりこま絆の森プロジェクト」で植樹活動を工事終了後から続けています。年に数回草刈りなどの作業や年2回の植樹活動を各団体の方たちと一緒に作業します。様々な方たちの技術や知恵に接することで、いろいろな作業や植物の知識などを得られます。森を守る活動の一環として行っている林の間引きにその木を薪割りし、有効利用する作業などを楽しみながら体験できます。

山で暮らすことの喜び、楽しみを共有する

この地と400年の温泉を守るためには様々な作業があり、山に暮らすことが必須です。400年間駒の湯を守ってきた人たちは冬の時期もこの地に留まっていました。今も冬の時期も山に暮らしながら、この地とお湯を守っています。雪の多い所で冬越しするため冬囲いなど冬支度、薪などの確保、除雪作業があります。しかし、大変なことばかりではなく、住んでいるからこそ味わえる冬時期の自然の営みや美しさ、雪の楽しさも共有したいと思っています。

